

Forest

2011.11.17 3学年通信 第10号

不安・悩みは相談を

大人の話を知りたいとき

● 2つの会話

進路の選択も大詰めをむかえてきたようです。

みんなの真剣さもひととき高まるのを感じます。先生たちとみんなと、進路について話をしている光景をあちこちで見かけます。

みんなそれぞれ大きな悩みをかかえているのが伝わってきます。ちょっと思い出す会話を紹介しましょうか。（東京の中先生のお話です）

—— ある男の子との会話

〇〇君「先生、希望の学校に入るのはちょっとキビシイと言われたんです……。でも、がんばればなんとかなりますか？」

先生「うーん、それはボクにもわからないなあ。実際に受けてみないとね。ただ、今までの結果では合格してないのか……」

〇〇君「前からそこを目標にしてきたから、目標を下げたくないんです」

先生「そうだろうね。ボクも“夢”は大

事にしてもらいたいと思うよ。

だから、自分の現実の力を見ながら、その自分の夢と、落ちる可能性との両方から、自分で判断してほしいと思ってるんだ。ただ、一つ気になるのは、<ギリギリで合格したとしたら、きっと〇〇君は、その学校で苦勞するかも知れない>ってことかな。授業にしても何にしても、中間ぐらいの人を基準に進んでいくと思うんだよね。高校は中学より授業の進度が速いから。授業が分からなくなったり、成績が他のみんなに比べてすごく低かったりしたら、挫折感(ザセツカン)を強く味わったりすることになるかもしれないんだよね」

〇〇君「そう言われると心配になりますよ」

先生「とにかく、そういういろんなことを考えながら、自分が納得できるような選択をしてね。ボクは選べないもんね(アドバイスはできるけど)」

—— ある女の子との会話

〇〇さん「先生、うちの親はすごくものわかりがいいんです。進路も<自分で決めるのよ>って言って、私がまかされているんです」

先生「いいお母さん・お父さんじゃない」

〇〇さん「でも、つらい時もあるんです。もっと<勉強しなさい>って言ってくれた方がいいと思うときもあるんです」

先生「ウ〜ン、そうかもしれないね。そう言えば、ボクも両親から<進路は自分で決めなさい>って言われていたけど、あれはまたつらい時があるんだよ。なかなか自分一人では決められなかったりするんだよね」

〇〇さん「そうそう。いつも自分でって

言われると、かえって苦しくなるときもあるんです」

先生「時には意見を聞かせてもらいたくもなるよね。ボクもそうだったけど、まかされるのは、それなりにまたつらいんだ。＜自分で全部責任をとらないといけなくて、しかも言い訳ができない＞ってというのは、なかなか大変なんだよ。他の人は＜親がうるさく言わないなんて、うらやまし～～！＞なんて言うんだけど、それほどうらやましくなかったりする時もあるんだよね」

〇〇さん「そうそう。ほんとにそう思う」
先生「ただ、今考えると、＜やっぱりまかせてもらえてよかったなあ＞って思うよ。苦しいながらも、自分で選べて自分で納得できたからね。ただ、＜自分で選ぶ＞ために、いろいろ相談相手になってほしいと思うよ。親の意見も聞きながら、結局自分が一番いいと思う道を選ぶというのが、自分でも安心できるから。すべてをまかされて、すべて自分でっていうのは、先のことが分からない身としては、未来が想像できなくてつらい面もあるよね」

〇〇さん「そう。自分で選んでも自信がないのよ」

先生「そういう時に、いろんな人生の経験話を話してもらえるといいんだよね」

自分の進路は自分で決める

そんな会話の中で、「自分の進路は自分で決める」という言葉が、出てくるのに気が付きます。けど、「自分で決める」というのは、なかなか難しいこと。そう簡単に決められないから悩むんだし、決めても「それが一番いい道なのか？」などと考えだしたら、急に不安になってきた

りします。

ある意味では、自分が決めたのが「ベスト」と割り切ることも大事かもしれませぬ。

でも、「これで安心」というような道はないのです。「＜どんな進路がいいか＞は誰にも分からない」ものなのですから。どういう選択をしたとしても、どの道でもやっぱり不安・心配はつきもの。それはこれから新しい世界に飛び込むみんなが当然感じる未知の世界に対する怖さかもしれません。

こういう時期こそ、大人の話聞けると少し安心できるかもしれませんね。

また、「**自分の進路は自分で決める**」という言葉は、「**自分勝手に決めていい、親は口出ししてはいけない**」という意味ではありません。保護者としてみんなの生活の面倒を見ていくお母さん・お父さんたちがみんなの将来について意見を言うのは当然のことです。親としてのいろんな願いもあります。

そういう願いや意見もいっぱい聞いたらうで、最終的にはみんなが決めてもらいたいということです。「**決める**」というのは、「**自分を含め、まわりの人たちに自分の選択を納得してもらおう**」ということです。そういう努力があったうで、初めて「自分の進路は自分で決めた」と言えるのではないのでしょうか？

まわりがどう考えても、やっぱり「自分の人生の主人公は自分（子どもたち自身）なわけです。決して代わってあげることのできない私たち大人は、そのことを大事にしながら子どもたちとかかわっていったらと願っています。

友人の中学校の先生から、次のような文を紹介してもらいました。中学生の書いた作文だそうです。進路決定に関して

不安になるこの時期、いろいろな人の実際の体験や悩みを聞けたらいいですね。

入試と母

夜、母と話をしていました。
母は静かな声で話しました。
なんの話かというと、
入試のことなのです。
母は高校受験に失敗したそうです。
合格発表があった日
一歩も家から出られなくて
泣いていたそうです。
だから世間話などで、
あの子が入ったとか、
この子は落ちたとか、
そんな話は一切しません。
今になってみると、
あのときの事が
ひどく役に立ったとってました。
心のやさしさの大切さ。
いろんな人の気持ちや立場。
それがわかることの大切さを
その体験から学んだそうです。
不合格を冷たい目で見ない母を
ぼくは尊敬します。
今夜、母が一層好きになりました。
母を前より尊敬する気になりました。

『進路・進学と高校受験の基礎知識』

(あゆみ出版)